

変化するものと不変のもの

(2000年頭に思う)

.....最も強いものや最も賢いものが生き残るのではない。最も変化に敏感なものが生き残るのだ。.....(ダーウィン「種の起源」)

昨年私が出会った言葉の中で、最も衝撃を受けた言葉の一つが上の言葉である。この言葉が歴史的著書と云われている「種の起源」の中で述べられていることを雑誌で知った。残念ながら私は「種の起源」を読んでいないが、この言葉がまるで現在の企業社会そのものを言っているように思えて正直驚いた。この驚きが衝撃の理由であったと思う。

私の浅い知識の中では、ダーウィンは生物進化の法則を発見した歴史的偉人である。しかしそれでも、おそらく経済とか企業社会などは全く無縁の人だったに違いない。そんな人の言葉が、いやそんな人の言葉であるが故に、上の言葉は私に強烈なインパクトを与えた。

そうなのだ。歴史を見れば、必ずしも最強のものや最大のもの、あるいは最賢のものが生き残るとは限らない。ダーウィンに倣って云えば、変化する環境に適應できるものこそが生き残ってきたのだ。

企業社会の中で今、壮絶な生き残りの戦いが行われている。その様を見ていると、生き残りにも法則というものがあるように見えるが、ダーウィンの言葉はその一つの法則だと思ふ。

以前「従流志不変」(流れに従い志を変えず)という言葉を書いたが、流れ従うとは変化に敏感であるであると理解したい。ともすると変化に抗いたい気持は誰にも強い。私にしても、おそらく貴方にしても、出来得れば現状をを変えたくない、このままでいたい、そういう気持があることを否定出来ない。それは人間の持っている本能的保守性であろうが、変化の時代にはそうした保守性がマイナスに作用する。

昨年の株式マーケットを覗いてみると、一面でとても興味深い現象が起こっている。余り目立たない現象ではあるが、最強のものも時代の流れの前に立ちすくんでいるように見えた。それは三菱グループ企業の株価動向である。

三菱グループ企業の株価不振は、昨年の市場が伝えた強いメッセージの一つである(と思う)。

同グループ中心企業である三菱重工業が14年振りの安値を付けたことはその象徴であった。都銀最強と云われる東京三菱銀行も、株価だけを見ると決して市場の評価は高くなく、他の三菱グループ企業も押し並べて低調であった。

明治誕生の三菱グループは「国家と共に歩む」ことを自負する企業集団である。そのグループ企業の株価不振は何を意味するのであろうか。もちろん断定的に云う積もりはないが、明治以来の大変化が起こっている可能性がある。国家と共に歩む日本最強の企業集団が、現在起こっている変化を嫌ったとしても何ら不思議でない。三菱グループはダーウィンの冒頭の言葉の実験台としての資格を十分持っているのだ。その意味でこの2000年は、企業集団としての三菱グループの動向に注視すべきである。

三菱グループが何処へ向かうかは別として、翻って中小企業もダーウィンの云うように時代の変化に敏感になる必要がある。しかして、樹てた志も堅持すべきであろう。

そんな時代の中で経営者の指針となるものは色々あると思うが、京セラの稲盛会長が「経営の原点」として経営の原理原則を12項目挙げている。ご存知の方も多いだろうが、ここに書かせて頂く。参考にして頂ければ幸いである。

1. 事業の目的・意義を明確にする
2. 目標を明確にする
3. 強烈な願望を心に抱く
4. 誰にも負けない努力をする
5. 売上を最大限に、経費を最小限に
6. 値決めは経営なり
7. 経営は意志で決まる
8. 激しい闘魂を持つ
9. 真の勇気を持つ
10. 常に創造的な仕事をする
11. 思いやりの心で誠実に
12. 常に明るく前向きに、夢と希望を抱いて素直な心で

この12項目全てに 印を付けられれば、おそらく成功者になれる。私達の多くは、このように力強く、そして気高く生きられない。それでもこの節目の年の年頭に当たって、一つでも 印を増やして前進したいと思う。

最後になりましたが、本年もどうぞ宜しくお願ひ申し上げます。